

## レオンの『960年聖書』写本挿絵構成上の刷新点に関して

毛塚 実江子

### はじめに 問題の所在

スペイン北部レオンのサン・イシドール王立参事会聖堂に所蔵されている<sup>1</sup>聖書 (Cod. 2) は、960年の年記が残る旧約・新約を収めた一巻本聖書写本である (以下『960年聖書』)。豊富な挿絵と古ラテン語の交じるテキストを持ち、美術史ばかりか聖書研究においても貴重な遺例として知られている。挿絵は旧約聖書を中心に120点余り描かれているが、それらの伝播経路はもとより、主題選択の基準に関してもいまだ有力な解釈は呈されていない<sup>2</sup>。『960年聖書』に先行する旧約図像作例が少ないことと、手本となったとされる聖書写本が失われ、主題選択に関して何の手がかりも残されていないことがその理由である。解釈をさらに難しくしているのは、先行研究で特徴的とみなされる挿絵群である。これらは数少ない類例と照らし合わせても例外的と言える特徴を持つため、先行研究では合理的な解説が試みられることはほとんどなく、作者の理解が及ばなかったか、ミスによる産物とみなされることさえもあった。しかし、個々の挿絵の検討を経て写本全体でそれらを見直したとき、予型論や贖罪といった神学的な解釈が成立する可能性が浮上する。少なくとも、単に例外的な特徴とのみ扱われてきた挿絵において、旧約・新約両聖書を統一する視覚的な工夫を読みとることができる。本稿では、同写本の特徴的な挿絵7点を中心に写本挿絵構成に関する新たな解釈を試みる。そして、これらの特徴的な挿絵が『960年聖書』における刷新点であった可能性を提示したい。

<sup>1</sup> 現状は縦47.5、横34.5、厚さ8.2cm、全517葉、約20kg。テキストは西ゴート文字で51行、2コラムにわたる。f. 514には写字生にして挿絵師のサンクティウスSanctiusとその師フロレンティウスFlorentiusの名が記されている。その直前のf. 513vにサンクティウスによる銘文がありXIII klds (kalendas) ils (Julias) era DCCCCLXLVIII (西暦では960年6月19日)の日付が認められる。制作地はブルゴス近郊のパレラニカ修道院と推定され、レオンには12世紀までに移された。Llamazares, J. P., *Catálogo de los códices y documentos de la Real Colegiata de San Isidoro de León*, León, 1923, pp. 18-24.

<sup>2</sup> 同写本研究の第一人者であったウィリアムズはビザンティン聖書写本やモザイク、ドゥラ・エウロポスに遡る作例を列挙したあとに、『960年聖書』の挿絵について、どの伝統とのつながりを見つけることも難しいと記している。Williams, J. "The Bible in Spain", *Imaging the Medieval Bible*, Princeton, 1999 (Williams 1999), pp.179-218, esp. 216.

## 1. 『960年聖書』とその挿絵

同聖書の美術史的な研究が始められたのは1960年代以降であり、1962年にウィリアムズのモノグラフィー研究によって挿絵の総合的な図像の分析が行われた<sup>3</sup>。先行研究では、古典古代の作例からカロリング朝写本<sup>4</sup>、テキスト系統を同じくする12世紀以降の聖書写本や、11世紀のビザンティン写本との比較が試みられた<sup>5</sup>。1997年に『960年聖書』のファクシミリが作成され、その解説本として、歴史学、古文書学、美術史学の各分野による総合的な研究論文集 *Codex biblicus leionensis : Veinte estudios*, León 1999 (*Veinte estudios*) が刊行された。歴史学、古文書学、美術史学、写本学の各分野から20の研究が寄せられたが、ウィリアムズ以降、図像の伝播や写本の影響関係に関する新知見はほとんど見られない<sup>6</sup>。とりわけ旧約聖書の挿絵の主題選択に関しては、説明が困難であると結論された<sup>7</sup>。同写本の挿絵は冒頭の「マイエスタス・ドミニ」(f. 2 図1)、「書誌目録」に一对の人物と天使 (f. 4v 図2)、「キリストの系図」に (ff. 5v-10) 数点 (図3、4) 配され、旧約聖書に92点 (f. 50 図5) のナラティブな挿絵が残る。新約聖書には、対観表 (ff. 396v-404v) の福音書記者像を除けば、挿絵は4点のパウロの肖像 (f. 465v 図6) と「オメガ」(f. 514 図7) である。本稿では『960年聖書』写本の特徴的な挿絵を追い、そのうえでそれらの共通点をまとめる。

<sup>3</sup> Williams, J., *Illustrations of the León Bible of the Year 960 : an Iconographic Analysis* (Ph.D.), University of Michigan, 1962 (Williams 1962).

<sup>4</sup> Mütterich, F., *Karolingische Buchmalerei*, München, 1976. 『シュトゥットガルト詩篇』(州立ヴェルテンベルク図書館Bibl.fol.23)の出エジプト記挿絵の登場人物と天使の描き方に『960年聖書』との関連性を見出した。11世紀のビザンティン写本との共通点からより古い原型の写本を指摘した。

<sup>5</sup> Suárez González, A. I., *A propósito de la corrección en manuscritos latinos medievales. Artifices, objectives y procedimientos de corrección en los Códices III 1. III 2. III 3. y IV* (3 vols.) esp., III 2. 同系統のテキストを持つ『1162年聖書』(レオン、サン・イシドロ王立参事会聖堂, Cod. 3)との詳細な比較を行い、主題と挿絵が必ずしも全て厳密に写し取られているわけではないことを証した。その他、他の写本との比較や同主題の挿絵研究で『960年聖書』挿絵が取り上げられることは少なくないが、総合的な挿絵分析の研究は未だなされていない。

<sup>6</sup> *Veinte Estudios* において図像解説を担当したベラステギはウィリアムズの解説をほぼ踏襲している。Silva y Verástegui, "La iconografía de la Biblia de San Isidoro de León", *Veinte Estudios*, 1999 (Verástegui 1999), pp. 187-206.

<sup>7</sup> 当時の典礼との対応関係から説明を試みたウィリアムズは *Liber Ordinum* (典礼用礼拝定式書) と *Liber Comicus* (典礼用聖書抜粋) に集められた典礼で読まれる文書と旧約聖書との対応関係の比較を行った。列王記では31作例のうち4点、申命記では4作例のうち2点、ヨブ記とエレミヤ記の9点の挿絵には共通点はなかった。なんらかの関連性が認められたのは旧約聖書の92点の挿絵のうち50点のみである、とウィリアムズは結論している。Williams 1999, p. 208. 典礼の式文に旧約聖書が引用されることは数多く、そもそも『960年聖書』には最も典礼との関連性が高いと思われる詩篇の挿絵が含まれていないため、この数字を以て挿絵選択の基準として説明しうるかどうかは疑問が残る。

## 2. 「マイエスタス・ドミニ」の「日の老いたる者」としてのキリスト

『960年聖書』冒頭には、四福音書記者のシンボルに囲まれ、キリストが顕現する、いわゆる「マイエスタス・ドミニ」の形をとった挿絵が置かれている(図1)<sup>8</sup>。植物文様の枠取られた矩形の中、中央のメダイオンには十字架の付いたニンプスをいただくキリスト、それを囲むように左上から右上に反時計周りに、ルカ、マルコ、マタイ、ヨハネが、それぞれ雄牛、獅子、人、鷲の、獣のシンボルで半身像で巻物を広げた形で描かれている。このメダイオンの形式は古い伝統に従うものであることが指摘されている<sup>9</sup>が、図1の「マイエスタス・ドミニ」には伝統的な図像からは大きく外れる点が見られる。まず、新約聖書や福音書の冒頭に置かれるこの主題が、『960年聖書』においては一巻本聖書の冒頭挿絵に配されていること<sup>10</sup>、次に、壮年で描かれるはずのキリストが白髪で表され、聖書を2冊持っているようにも描かれていること<sup>11</sup>、四福音書記者の配置が類例のない点である。

ウィリアムズは図1に類似したキリストの図像が同時代のヨハネ福音書冒頭にも見られたことを根拠に、この「マイエスタス・ドミニ」も本当ならば神の顕現図で福音書の冒頭を飾るべきものであったとし、一巻本聖書の冒頭に置かれたことに改めて疑問を呈した<sup>12</sup>。一方、ベラステギは、その類似した作例がヨハネ福音書冒頭にあった点に着目し、天地創造以前に存在した「ロゴス」を表すとした<sup>13</sup>。その解釈であれば『960年聖書』の冒頭に「マイエスタス・ドミニ」が配されたことも説明がつくだろう<sup>14</sup>。キリストの容貌に関しても、顕現する神そのものが白髪で描かれる先行作例は少なく<sup>15</sup>、ウィリアムズはこれらの特徴はフロレンティウスが図像学に詳しくなかつ

<sup>8</sup> この挿絵についての詳細は拙稿『『960年聖書』冒頭挿絵「荘厳のキリスト(「マイエスタス・ドミニ」)」を巡って』ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所『エフクラシス—ヨーロッパ文化研究—』第1号、2011年、pp. 26-40を参照されたい。

<sup>9</sup> 同主題の先行作例として8世紀半ばの写本挿絵が指摘されている。『グンドヒヌスの福音書』(オータン市立図書館ms. 3)の「マイエスタス・ドミニ」(f. 12v) Nee, L., *The Gundohinus Gospels*, Cambridge, 1987, pp. 131-188.

<sup>10</sup> Suárez González, I. A., "Arqueología del Códice", *Veinte estudios*, pp. 87-110, esp. 90. 冒頭の綴じ(クワイヤ)が不規則であるため断言はできないものの、この「マイエスタス・ドミニ」が写本の最初に置かれた可能性が高いとしている。

<sup>11</sup> Williams 1962, p. 45; *The Early Spanish Manuscript Illumination*, New York, 1977 (Williams 1977), p. 55. この点は本稿では割愛する。註8の論文を参照されたい。

<sup>12</sup> サン・ミリアン・デ・ラ・コゴージャ修道院の『説教集』(マドリード、王立歴史資料館Cod. 39「ヨハネ福音書」冒頭にメダイオンに現れた白髪無髭の神が表されている。

<sup>13</sup> Verástegui, *Iconografía del siglo X en el Reino de Pamplona*, Pamplona, 1984 (Verástegui 1984), pp. 81-83, 181-184.

<sup>14</sup> Ead., esp. 184.

<sup>15</sup> 6世紀シナイ山カタリナ修道院のイコンが先行作例である。Weitzmann, K., *The Monastery of Saint Catherine at Mount Sinai, The Icons, 1: from the 6<sup>th</sup> to the 10<sup>th</sup> century*, Princeton, 1976, pp. 41-42, fig. B16. ヴァイツマンはこのキリストを「日の老いたる者」でありながら「インマヌエル」の銘文を持つためロゴスの象徴

たためと解釈した<sup>16</sup>。しかし執筆者はこの白髪を同時代のヨハネ黙示録註解写本（ベアトゥス写本）にもたびたび描かれた<sup>17</sup>ダニエル書「日の老いたる者」（ダニ 7:9）に由来する「白髪の日の老いたる者のヴィジョン」（黙 1:10-20）であると考えたい。同時代のベアトゥス写本には黙示録註解に加えてヒエロニムスによるダニエル書註解が取り入れられた背景があるからである。そのため図1のキリストの胸部には黄色の帯について、ベアトゥスは「旧約の律法と新約の福音を表す」と解釈している<sup>18</sup>。以上を踏まえれば図1のキリストは「日の老いたる者」の姿をとりながらヨハネ福音書の「ロゴス」を表し、それにゆえに新約と旧約の双方を総べる図像とも解釈でき、この「マイエスタス・ドミニ」挿絵が一巻本聖書冒頭に置かれたことへの説明が成立する。

さらに周囲の四福音書記者のシンボルも「巻物」を手に描かれている点が特徴として指摘できる。多くの「マイエスタス・ドミニ」は、新約聖書の前に置かれることもあり、福音書記者のシンボルはそれぞれの福音書（冊子本）を手にしている。これに対し旧約の預言者はしばしば巻物を手にして描かれる<sup>19</sup>。『960年聖書』の対観表装飾においては福音書記者像のシンボルが冊子本を手に描かれていることを考慮すれば、表現の差異は明らかであり、執筆者は「巻物」によって旧約聖書と結び付けた表現を試みたのではないかと考えている。

さらに、「マイエスタス・ドミニ」の四福音書記者のルカを左上に置くという例外的な配置についてウィリアムズは、図像表現が定まらず、混乱があったためとしている<sup>20</sup>。しかし例えばア

---

として解釈している。

<sup>16</sup> Williams 1977, p. 55.

<sup>17</sup> ベアトゥス写本は8世紀の修道士ベアトゥスによる黙示録註解写本の総称で、10-13世紀の現存作例が28点にのぼる。玉座のヴィジョンにおいて、白髪で表される同時代作例が残る（エル・エスコリアル修道院図書館、Cod. & II. 5, f. 142v およびニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館Ms. 644, f. 83）。

<sup>18</sup> “legem et Evangelium” Beato de Liébana, *Obras Completas de Beato de Liébana (Obras)*, (eds.) Echegaray, J., G., A. del Campo, Freeman, L. G., Madrid, 1995, p. 94, col. 212.

<sup>19</sup> 例えば一巻本聖書である『ヴィヴィアンの聖書』（パリ、国立図書館Mn. lat. 1）の「マイエスタス・ドミニ（f. 329）」や『サン・パウロ・フオリ・レ・ムーラの聖書』（同修道院所蔵）の「マイエスタス・ドミニ（f. 259v）」においても、預言者が持つ聖書は巻物、福音書記者像が手にするのは冊子本と描き分けられている。この描写の差はすでにシャピロによって指摘されている。Schapiro, M., “Two Romanesque Drawings in Auxerre and Some Iconographic Problems”, *Studies in Art and Literature for Belle da Costa Greene*, 1954, pp. 331-349. (rep. 1977, in *Romanesque Art*, pp. 306-327, esp. 307.)

<sup>20</sup> Williams 1962, pp. 46-47, 53-54.

ウグスティヌス<sup>21</sup>や大グレゴリウス<sup>22</sup>、その流れを引いたベアトゥス<sup>23</sup>によって旧約と犠牲の象徴とされていた雄牛を左上、つまりシンボルの最初に置いたと考えることもそれほどの外れではないだろう。

アユソやウィリアムズの研究から、『960年聖書』は943年に制作された、通称『オーニャ聖書』の忠実な写しであると指摘されている<sup>24</sup>。しかし「マイエスタス・ドミニ」については、現存する同系統の聖書から類推するに新たに作成された挿絵であった可能性も考えられる。ウィリアムズによれば、『960年聖書』と同系統の『1162年聖書』は、『960年聖書』と同様に『オーニャ聖書』を写したとされている<sup>25</sup>が、その冒頭挿絵に「マイエスタス・ドミニ」は含まれていない<sup>26</sup>。『1162年聖書』の冒頭クワイアに失われたフォリオはなく、重要な挿絵を写さなかったとは考えにくく、もともと『オーニャ聖書』にはなかった「マイエスタス・ドミニ」が『960年聖書』において採用された可能性も否定できないのである。

<sup>21</sup> 例えばアウグスティヌスはその著作『福音書記者の一致』第一巻第六章で、「黙示録の生き物」が福音書記者に当てはまると論じたうえで、マタイ、ルカ、マルコが、ヨハネよりもキリストの生涯、受肉に深く関わりとし、雄牛が犠牲であるという主張が繰り返されている。Augustinus, A., "De consensus evangelistarum," *Sancti Augustini pera omnia*, Migne, J.P., *Patrologiae cursus completus, series latina (PL)* 32, Paris, 1845; S. D. F. Salmond (tr.), *The Sermon or the Mount Expounded, and the Harmony of the Evangelista*, Edinburgh, 1873, pp. 147-148.

<sup>22</sup> 大グレゴリウスも旧約と新約の父祖たちを対応させ、以下のように説明している。「雄牛とは旧約の父祖たちのことである。事実、父祖たちは、反対者たちに憎しみを返して彼らを打つことを律法によって許されていたから、その肉体の力である角で敵を殺した雄牛といえるであろう。』『福音書講話』、熊谷賢二訳、創文社、1995年、pp. 187-188 (『福音書講話』)。Sancti Gregorii magni, Romani Pontificis: *XL homiliarum in evangelia*, Harvard, 1892, pp.336-337.

<sup>23</sup> ベアトゥスもその註解のなかで、雄牛と受難を繰り返し結びつけて論じている。Beato de Liébana, *Obras*, pp. 294-301, esp. 300.

<sup>24</sup> Díaz y Díaz, M. C., "El Escritorio de Valeránica", *Veinte estudios*, pp. 53-72, esp. 63. 『オーニャの聖書』は新約聖書の断葉が12葉残されるのみで、挿絵はなく、ウィリアムズの論点は、17世紀に残された奥付の書写とイニシャルの類似である。11葉はLa Hermandad de Sacerdotes Operarios Diocesanosに、残りの一葉はサント・ドミンゴ・デ・シロス修道院に分蔵されている。Williams, "A Model for the León Bibles", *Madrid Mitteilungen* 8, 1967, pp. 281-286. 『オーニャの聖書』については以下を参照。Ayuso, T., *La Biblia de Oña: Un notable fragmento casi desconocido de un códice visigótico homogéneo de la Biblia de San Isidoro de León*, Zaragoza, 1945; Shailor, B., "Corrections and Additions to the Catalogue of Visigothic Manuscripts", *Scriptorium* 32, 1978, pp. 310-312, esp. 312.

<sup>25</sup> Verástegui 1999, p. 250.

<sup>26</sup> 冒頭の挿絵は「キリストの系図」(ff. 1v-4)と、キリストの受肉のアレゴリーである「鳥と蛇の戦い」(f. 6)で終わっている。

### 3. 「書誌目録」と「杯を掲げる」一対の人物

図2は『960年聖書』に含まれている旧約・新約の72の書名を一覧にした「書誌目録」である。各書名は建築を模したアーチの内部に番号を付されて並べられている。しかし必ずしもこれらの順番と『960年聖書』の順番は一致しないため、これらは目次ではなく、あくまで書誌の一覧であることが分かる<sup>27</sup>。銘文には「聖霊がこれらの書を記す」AUCTOR ISTORUM LIBRORUM SPIRITUS (SPS) SANCTUS (SCS) ESTとあり、書誌の並びはイシドルスやアウグスティヌスの提唱した並び方に準じている<sup>28</sup>。しかしこの一覧は、アユソによれば『960年聖書』のテキスト系統からは逸脱しているため、おそらく別系統のテキストから意図的に加えられたことが推定される<sup>29</sup>。そうであるならば、一覧の上部のアーチの頂きに配された天使と、その下部の、杯を掲げる一対の人物もまた、「マイエスタス・ドミニ」と同様に新たに同写本に加えられた挿絵である可能性が高い。

### 4. キリストの系図の「アダムとエバ」、聖母子と天使

『960年聖書』の冒頭に置かれたキリストの系図 (ff. 5v-10) は、マタイ福音書 (1: 1-17) とルカ福音書 (3: 23-38) に由来する、アダムとエバの父祖からマリアとキリストに連なる父祖名の一覧である。『960年聖書』では10フォリオにわたってメダイヨンの中に名前がつづられている。この系図は、10世紀のベアトゥス写本、とくにモーガン本 (ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館 Ms.644) に先行する作例 (ff.4v-9v) があり、内容から考慮すれば、おそらく聖書写本から黙示録写本へ流用されたと考えられている<sup>30</sup>。現存する同主題の作例のなかでも、『960年聖書』の系図は2つの点で他と大きく異なっている。まずは、図3に見られるように、アダムとエバが「着衣」で描かれている点である。そして系図の最後、図4「聖母子と天使」において、天使ガブリエルと「聖母子」が描かれている点である。他の同主題の先行作例ではアダムとエバ

<sup>27</sup> 実際の写本の内容とは異なり「使徒行伝、公同書簡、パウロ書簡」の順になっている。Ayuso, T. M., *La Biblia visigótica de San Isidoro de León: Contribución al estudio de la Vulgata en España, Serie I. Publicación y estudio de códices*, vol. 8 (Ayuso 1965), Madrid, 1965, pp. 93-99.

<sup>28</sup> イシドルスは旧新約72冊の全書に対し「主の宝庫から取り出された、聖約の奥義がすべて啓示されている新約と旧約である。(中略)これらの聖なる文書は数と神聖性において完全な書である。これらと比し得るものは他に何も無い。」と述べている。Fiunt ergo in ordine utriusque Testamenti libri septuaginta et duo. (...) Haec sunt enim nova et vetera, quae de thesauro Domini proferuntur, e quibus cuncta sacramentorum mysteria revelantur. (...) Hae litterae sacrae, hi libri integri numero et auctoritate: aliud cum istis nihil est comparandum. Isidorus Hispalensis, In "Libros Veteris ac Novi Testamenti Prooemia", PL 83, col. 155-180, 0160A-B, 蛭沼寿雄『新約正典のプロセス』山本書店、1972年, pp. 150, 174, 152, 187-89, esp. 188.

<sup>29</sup> Ayuso, 1965.

<sup>30</sup> Williams, "The Beatus Commentaries and Spanish Bible Illustration", *Actas del simposio para el estudio de los códices del 'Comentario al Apocalipsis' de Beato de Liébana*, 1978, vol. 1, pp. 201-219.



は裸体で描かれる。ウィリアムズは通常であれば「樂園追放後」を表す「着衣」の表現を、原罪よりも人類の父祖としての役目を強調するためと解釈している<sup>31</sup>が、そうであるなら、それはどのような意図によるものだろうかという疑問が残る。そして、系図の最後の図像が、天使ガブリエルを伴った「聖母子」である点は着目される。図像には天使ガブリエル *angels gabriel* の銘があり、伝統的には受胎告知に相当する場面である。920年に制作された聖書のキリスト伝の「受胎告知」にはマリアとガブリエルのみが描かれており、この伝統的な図像が知られていたことは明らかである<sup>32</sup>。玉座の聖母子に、羊飼いの礼拝が組み合わされて描かれる作例も残るため<sup>33</sup>、ウィリアムズは『960年聖書』の図4も本来は礼拝図の一部であったと解釈した<sup>34</sup>。しかし執筆者は、本来なら、描かれなければならないキリストが聖母の膝の上に表れていることこそがここでは重要なのではないかと考えている。「聖母子と天使」が描かれたメダイヨンの下には次の銘文が置かれている。

福音書記者ルカは、ナタンからマリアまでの系図を示し、福音書記者マタイはソロモンからヨセフまでの系図を示す。すなわち、ユダの部族から出た者であるということである。彼らに先立って現れる神の部族が受肉したキリストへと連続する。これはそこに書かれていたことが果たされるためであるかのようだ。ユダ族から出た獅子が勝利を得たのを見よ。その方はソロモンに遡る獅子であり、ナタンに遡るひこばえである。<sup>35</sup>

先述したようにキリストの系図はマタイとルカの福音書に由来するが、銘文はこの系図はキリストが「ユダ族の獅子、ダビデの末裔」であるとともに、「ナタンの子孫」であり、メシアはダビデの子であると同時に、預言者ナタンの系列につながっていることを示している。イエスと神とを結ぶ系図は他の文書にはないルカ福音書に独自の記述であり、ゴッペルトはこれをアダムとキリストの予型論的關係性を支える典拠の一つとし、アダムや神に遡るルカ福音書の特徴を強調

<sup>31</sup> Williams 1962, p. 51.

<sup>32</sup> レオン大聖堂所蔵 (Cod. 6) f. 201v.

<sup>33</sup> たとえば12世紀末のベアトゥス写本では同系図の末にはマギの礼拝が描かれている (マンチェスター、ジョン・ライランズ大学図書館、Ms. lat. 8, f. 13 ; カルデーニャ本、メトロポリタン美術館分蔵f. 3[n]) 等。

<sup>34</sup> Williams 1962, p. 51.

<sup>35</sup> *sicut Lucas evangelista per Natan ad Mariam originem ducit, ita et Matheus evangelista per salomon ad Ioseph originem demonstrabit id est extribu Iuda. さらにメダイヨン最下部には Ut apparet eos de una tribu exire et sic ad Christum secum dum carnem pervenire. Ut compleatur quod scriptum est "Ecce vicit leo ad tribu Iuda radix David", leo ex Salomone et radix ex Natan.* 宮内氏はマタイ、ルカの系図がともにダビデを分岐点としていることから、ダビデからの連続性を強調していると分析した。宮内ふじ乃『ジローナ大聖堂所蔵ベアトゥス黙示録註解書写本の巻頭挿絵研究』立教大学大学院文学研究科、博士学位論文、2004年、pp. 36-37.

した<sup>36</sup>。キリストが神の子でありメシアであるということを裏付けるこの「キリストの系図」は、8世紀のトレドのエリパンドゥスの養子論を否定するベアトゥス以来の立場を保証するものであり、この「系図」が10世紀のベアトゥス黙示録註解写本において挿入されたことは、この神学的伝統とは矛盾しないだろう。そしてこのナタンへの言及はマリアの起源を証しするものである。このフォリオの最下段には、キリスト伝を総括した文章が記されている<sup>37</sup>。その冒頭は「神の子であるイエス・キリストは、ユダヤのベツレヘムでマリアを通して肉となった」とある。『960年聖書』の挿絵は近接するテキストに対応していることが多いという特質<sup>38</sup>をも考慮するなら、これらの銘文はメダイヨンの「聖母子」にも影響を与えているのではないだろうか。

ここで、同じメダイヨンに描かれた「マイエスタス・ドミニ」のキリストと、マリアの膝の上のキリストとの相互関係が想起される。さらに明白な共通点を挙げるなら、「マイエスタス・ドミニ」のキリストもマリアの膝の上のキリストも、赤い衣を纏っている点である。この共通点は例外的に着衣、とりわけ赤色の長衣をまとったアダムにも敷衍しうるのではないだろうか。

## 5. 救世主図像の予型論的解釈とその色彩

「マイエスタス・ドミニ」のキリスト(図1)、キリストの予型であるアダム(図3)、幼児キリスト(図4)、これらの共通点は明らかである。キリストの捕縛時の赤い外套(マタ27:28)を

<sup>36</sup> その背景として、ルカはパウロと師弟関係にあるために、第二のアダムとしてのキリストという考え方に詳しいとし、その根拠として、ルカ福音書23章24節で樂園に関する記述と、系図の説明の後すぐにキリストの誘惑に言及していることを挙げているGoppelt, L., *Typos. Die typologische Deutung des Alten Testaments in Neuen*, Bertelsmann, Gütersloh 1939, (rep. Darmstadt, 1990), pp. 97-100.

<sup>37</sup> 「神の子であるイエス・キリストは、ユダヤのベツレヘムでマリアを通して肉となった。そして彼が30歳の時、祭司であるザカリアの子である洗礼者ヨハネによって、彼が現れた日にヨルダン川で洗礼を受けた。その翌年、彼は福音書に示された奇跡を起こした。その降誕から確かに33年ののち、聖なる秘跡を弟子たちに教え、この世の全ての人々に神への点功を説くことを命じた。しかしながら、33歳の時、彼に関して予め示された預言を果たしながら、彼はティベリウスの治世の18年に受難へと向かった。我々の苦しみを背負い、徳によって我々の罪を取り除き、恩恵の輝きによって我々に栄光を与えたのである。maria de qua ihs xps dei filius in bethlem (sic) Iudae scdm (secundum) carnem natus est. Tricesimo etenim etatis sue anno expleto a Iohanne bapista (sic) filio zacarie sacerdotis de vice abia in Iordane flumine baptizatus (sic) est. In diem(sic) apparitionis sue. Inde sequenti anno mirabilia queque In evangelio scripta sunt fecit. In anno vero xxxo iio (sic) nativitatibus sue discipulos suos (sic) divinis Inbuens (sic) sacramentis Imperat ut universis gentibus predicent conversionem ad dm(deum).Tricesimo aum(autem) et tercio etatis sue anno sedm(secundum) prophetias que deto (sic) fuerant (sic) preloquute (sic) ad passionem venit anno tyberii xviii. Patiens (sic) q(que) nsa(nostra) sunt auferens obproprium (sic) beneficio suo. et gratie sue splendore nos In radiabit (ベアトゥス本においてはhiluminavitとなっている)。宮内、前掲書、p. 63を参考に『960年聖書』f. 10から書写し訳出した。

<sup>38</sup> 拙稿「レオンの『九六〇年聖書』写本の旧約挿絵研究」『スペイン・ラテンアメリカ美術研究』第12号、2011年、pp. 1-18. ほとんどの挿絵とテキストが緊密に結びついていることが確認された。



引用するまでもなく、すでにイザヤ書で述べられた救いをもたらすために来る「酒ぶねを踏む者のよう」に赤く染まった救世主の衣(イザ 63:1-3)の色彩である。この図像は救いの日に雲に乗って現れるキリストとして10世紀の『応唱歌集』(レオン大聖堂、Ms. 8 f. 198)や、黙示録第1章7節の「雲に乗って来る」のテキストに対応するベアトゥス写本の挿絵においても、全身あるいは上着が赤色で描かれる作例が残されている<sup>39</sup>。周囲の本文に色彩の指定はないが、おそらく黙示録19章の「血染めの衣」や、先述したイザヤ書の記述を参照していると考えられる<sup>40</sup>。

そして『960年聖書』の旧約聖書挿絵においても、予型論的にキリストに対比されうる人物<sup>41</sup>、例えばダビデやソロモン、神の人やエリヤやエリシャなども部分的ながら赤い衣をまとっている。ダビデはゴリアトと戦う場面(f. 119)、ナホム書(2:4)の「緋色の服」を連想させる赤い上着を着ている。ソロモンは、ダビデ王の白らろばに乗って町に凱旋する場面(f. 135)において、「ダビデの子」として祝福を受けながらろばに乗ってエルサレムに入るキリストと重ね合わされる<sup>42</sup>。エリヤは神の声を聞く場面(f. 114)やエリシャの前(f. 146)やオバドヤの前(f. 144v)では赤い衣、キリストの昇天と重ね合わされる昇天の際には白い衣と描き分けられ、挿絵によっては同色の濃度を変えるなど細かな工夫も認められる。エリシャも、ラザロの復活の予型でもある、シュネムの婦人の子をよみがえらせる場面(f. 147v)では赤い衣をまとっている<sup>43</sup>。

当時の写本挿絵の着色の特徴としては、色数は数点の原色に限られ、当然ながら隣り合う色は重ならないような配慮がなされる<sup>44</sup>。その制限された色数の中でも赤は優先されただろうといえる。少なくともアダムを始めとする予型論的にキリストに対応する人物に積極的に用いられたこの色彩は『960年聖書』挿絵の数少ない共通点の一つであると言える。

## 6. パウロ書簡と「杯を掲げる」パウロの肖像

『960年聖書』の新約聖書部分には4点の「パウロの肖像」(ff. 459v, 465v, 470v, 471)が置かれている<sup>45</sup>。ウィリアムズによれば、『960年聖書』が制作されたとされるバレラニカ修道院は、ペトロとパウロに捧げられた修道院であった<sup>46</sup>。そのためパウロの肖像が描かれること自体は不

<sup>39</sup> モーガン本(f. 26)、エスコリアル本(サン・ロレンソ・デ・エスコリアル、修道院付属図書館、Cod. & II. 5, f. 3v)、ウルジェイ本(セウ・ドゥルジェイ、大聖堂付属美術館、Inv. 501, f. 19)等。

<sup>40</sup> 例えばモーガン本では14章20節の「血」の色(ff. 112, 137v, 178v)と同様の赤黒い彩色になっている。

<sup>41</sup> Réau, L., *Iconographie de l'art chrétien*, t.1. pp. 199, 203, 206.

<sup>42</sup> *Ibid.* ソロモンについてもテキストに服装の描写はない(列上35:38-40)。

<sup>43</sup> *Ibid.*

<sup>44</sup> Werckmeister, O. K., "Art of the Frontier Mozarabic Monasticism", in *Art of Medieval Spain, 500-1200*, pp. 121-132, esp. 127.

<sup>45</sup> これらについては拙稿「レオンの『九六〇年聖書』の挿絵プログラム—パウロの肖像を中心に—」『美術史』179号, 2015, pp. 185-199を参照されたい。

<sup>46</sup> Williams 1970, pp. 231-248.

思議ではない。しかし「ペトロによる手紙」冒頭 (ff. 490v, 492) には肖像は付されず、パウロ書簡だけに付されていることから、なんらかの差異化が図られていたことが分かる。とくに4書簡はそれぞれの内容の対応関係が緊密であると考えられていたことが、書簡冒頭の canon と題された参照箇所に対応一覧から知れる (ff. 456-458)<sup>47</sup>。パウロの4書簡は神学的価値から聖書学において重視されるが<sup>48</sup>、10世紀のイベリア半島においても、例えば当時盛んに書写されたベアトウス黙示録註解等にも頻繁に引用されている<sup>49</sup>。「ローマの信徒への手紙」はパウロの神学的な思想が多く表わされている書簡として知られ、アダムをキリストの予型とする記述 (5: 12-21) ほか、10章ではイサク、ヤコブ、モーセ、イザヤとエリヤらの名を出し、イスラエルの人々の信仰と救済の歴史をまとめている。書簡末尾の個人的挨拶と一部人物 (サラ、リベカ、比較として挙げられたエサウ) を除けば、いずれもパウロ書簡で名を出されており、とくに主要な人物アブラハム、イサク、ヤコブ、モーセ、エリヤは全て同写本の挿絵に描かれている。

そのうち、「杯を掲げる」身振りで描かれている「コリントの信徒への手紙一」冒頭の人物がとくに着目される (図6)。図6のパウロの肖像は、書簡の冒頭 f. 465v の左コラムの外側余白に、ニンプスを戴き左手に杯、右手に杖を持つ姿で描かれている。描線を重ね合わせた頭髮は白髪のようにも見える。杖は伝道の象徴であるが、特徴的な「杯を掲げる」動作に関してウィリアムズはイスラム美術のモチーフをその起源の一つと指摘した<sup>50</sup>。ベラステギは作者の誤りである可能性を示唆した<sup>51</sup>。しかし最も着目すべきは、同写本において、この動作が f. 4v (図2) や後述す

<sup>47</sup> パウロ書簡は特定の章分けがされ、それぞれ対応箇所が一覧となっている。プリスキリアヌスによるパウロ書簡の一覧表であり、ペレグリヌスによって編集され、イベリア半島の聖書写本系列に見られるものである。Ayuso 1965, pp. 67-73; Chapman, J., *Notes on the Early History of the Vulgate Gospels*, Oxford, 1908, pp. 258-259. 対応箇所は90項目にわたるが、それらのうちで「ローマの信徒への手紙」では201箇所、「コリントの信徒への手紙一」では178箇所、「コリントの信徒への手紙二」では98箇所、「ガラテヤの信徒への手紙」では88箇所が重複して引用されている。「ヘブライ人への手紙」が4番目に引用箇所が多く、91箇所である。その次が「エフェソの信徒への手紙」で86箇所である。その他は、「コロサイの信徒への手紙」が58箇所、「テモテへの手紙一」が57箇所、「テモテへの手紙二」が32箇所、「テサロニケの信徒への手紙一」が29箇所、「テトスへの手紙」が22箇所、「フィリピの信徒への手紙」が18箇所、「テサロニケの信徒への手紙二」、および「フィレモンへの手紙」が11箇所である。

<sup>48</sup> 荒井献編『新約聖書正典の成立』日本キリスト教団出版、2006年、p. 33。とくに「ローマの信徒への手紙」が中心的なものとして書簡の初めに置かれた。ヴィルケンス、岩本修一訳『EKK新約聖書注解IV/1ローマ人への手紙 (1-5章)』1984年、教文館、p. 64。

<sup>49</sup> 筆者が確認しただけでも、アンブロシウス、アウグスティヌス、大グレゴリウスをはじめとする教父著作に引用されている。例えばベアトウスによる黙示録注釈の中での同様の引用は67箇所に上る。「ローマの信徒への手紙」や「コリントの信徒への手紙一」は他の書簡に比べてもベアトウスのヨハネ黙示録註解や、グレゴリウスのヨブ記註解による引用回数が多い。

<sup>50</sup> Williams 1962, p. 146.

<sup>51</sup> Verástegui 1999, p. 202. 975年のベアトウス写本ジローナ本の使徒像 (f. 53) と比較しパウロの持つ杯は、本来はヨハネのアトリビュートであるはずだとした。

るオメガ（図7）のような、奉献の身ぶりとされる描写<sup>52</sup>と共通する点である。このことから筆者は、このパウロは奉献の身振りで杯を捧げていると仮定し、この身振りはテキストである「コリントの信徒への手紙一」の「神を賛美する賛美の杯 calix benedictionis (10 : 16)」に対応して挿入されたのではないかと考える。同書簡の10章31節は「神を賛美する杯」をキリストの血、裂くパンをキリストの体とすると続き、偶像礼拝を避け、主の食卓につくよう説き、主の栄光を現すために飲食するように書かれたミサの典拠を支える重要な章句である。同書簡では福音書の記述に比べ、「杯」の言葉は「共同で回し飲むという行為遂行」に重点が置かれているとも解釈される<sup>53</sup>。同書簡11章では「主の晩餐」について詳述され<sup>54</sup>、23節以降は、食事について規定している。とくに25節ではキリスト自身の「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度にわたしの記念としてこのように行いなさい」とあり、飲食することがすなわち主を記念することであると明記している。さらに、執筆者はテキストを照合するにあたり、先行研究においては言及されていない変更点を認めた。この「コリントの信徒への手紙一」の冒頭にも他の新約聖書の書と同様に旧約聖書からの引用が略記された一覧<sup>55</sup>が置かれ、13の引用箇所が並んでいる。その末尾に、同書簡イザヤ書(22 : 13)の「manducemus et bibamus (食べよう、飲もう)」が記載されている<sup>56</sup>。この箇所は同書簡15章32節前半(食べたり飲んだりしようではないか Manducemus et bibamus)に相当し、本来であれば一覧の11番目に置かれるはずの一節である。この差は、単にこの一節が見落とされ、最後に追加された可能性も残るものの、他の旧約聖書引用の153箇所が厳密に記載順であるのに対し、この一節に限り最後に置かれている点、また杯を掲げるパウロの肖像に最も近い位置であることは注記しておきたい点である。

さらにこの「杯を掲げる」動作は、冒頭の書誌一覧の一对の人物、そしてオメガの下、献辞の両脇に描かれた人物にも共通している。そればかりでなく、『960年聖書』のなかでも最も大きく、唯一全ページ大に描かれた挿絵である「レビ記」の扉絵(f.50、図5)のアロンの傍らにも杯を

<sup>52</sup> Ana Suárez González, *Vente estudios*, p. 319.

<sup>53</sup> ギリシア語動詞の分析からエレミアスは杯を掲げる動作があったと推察している。J. エレミアス、田辺明子訳『イエスの聖餐のことば』日本基督教団出版局、1974年、p. 282。

<sup>54</sup> 並行記述は「コリントの信徒への手紙一」(2 : 23-26) マタ26 : 26-29、マコ14 : 22-25、ルカ22 : 14-20。

<sup>55</sup> 一覧はマタイでは31箇所(ff. 405-406)、マルコは10箇所(f. 419v)、ルカにはなく、ヨハネは14箇所(f. 445)、「ローマの信徒への手紙」では48箇所(f. 474)、「コリントの信徒への手紙一」では13箇所(f. 464)、「コリントの信徒への手紙二」では7箇所(f. 470v)、「ガラテヤの信徒への手紙」では8箇所(f. 473v)、「エフェソの信徒への手紙」には5箇所(f. 474)、使徒言行録には18箇所(f. 496)である。旧約聖書引用箇所が多い「ヘブライ人への手紙」とヨハネ黙示録には付されていない。

<sup>56</sup> イザヤ書22章13節の文脈では裁きの日を迎え神の命に反した民の言葉(彼らは喜び祝い牛を殺し、羊を屠り肉を食らい、酒を飲んで言った。「食らえ、飲め、明日は死ぬのだから」と。)である。一覧では「食らえ、飲め」の部分のみが引用されているが、著名な一節であり慣用的な使用が指摘されており、主の晩餐に関する記述でも飲み食いという形で頻出している(11 : 27-29)。Simonet., A. et al, *Sainte Bible expliquée et commentée, contenant le texte de la Vulgate*, Paris, 1840, p. 45.

持つ人物が描きこまれている。この人物の描写はレビ記にはないため、「書誌目録」一覧の人物同様に、新しく描き加えられたことも想定される。ウィリアムズは「ヘブライ人への手紙」(9: 1-28)<sup>57</sup>を典拠に、幕屋はエクレシアの予型であり、儀式を行うキリストとアロンは結び付けられているとした<sup>58</sup>。イベリア半島に特徴的なT字型祭壇の描写は同写本において描かれたキリストの系図 (f. 6) や旧約聖書の、イサクの犠牲の図像 (f. 21v) とともに共通し、キリストの犠牲と重ねあわされる。教会における祭壇と杯の象徴性は、たとえば同時代のベアトゥス写本、ジローナ本(ジローナ大聖堂宝物館 Num. Inv. 7.) のエフェソの教会他の挿絵において、教会の中に描かれたT字の祭壇に杯のみが置かれている図像が繰り返されている(ff. 71, 85, 94)ことも想起される。『960年聖書』の幕屋(図5)のアロンは、犠牲獣の血を祭壇に塗る動作を行っている。このアロンの傍らに、テキストには説明のない杯を持つ人物が描きこまれた理由は、キリストの血との関連をより明確に図示するためではないだろうか。そうであればこの「類例のない」<sup>59</sup>と形容された場面の特徴もまた、犠牲と奉獻の図像として緊密な対応関係を示すための工夫によるものなのである。

## 7. オメガと「杯を掲げる」一対の著者像

『960年聖書』の最後のフォリオの挿絵オメガ(図7)は、ギリシア文字のアルファベットの最後の文字であり、最初の文字アルファとともに初期中世イベリア半島で制作された写本の巻頭と末尾を飾る装飾文字である。『960年聖書』においても作者フロレンティウスとサンクティウスの献辞<sup>60</sup>の内容から、このフォリオは、作者が写本の完成を寿ぎ、神に感謝を捧げるために描かれたことは明らかである<sup>61</sup>。人物像がイニシャルの上下に一対ずつ配されていること、下の人々が「杯を掲げる」動作をしている点が特徴的である。この人物像は銘文に従えば作者サンクティウスとフロレンティウスである。久米氏はイベリア半島の写字生のサインの傾向を分析し、イニシャル上部の一対の人物もおそらく繰り返して描かれた二人であるだろうと推定した<sup>62</sup>。これら

<sup>57</sup> Williams 1999, p. 205.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 201.

<sup>59</sup> *Ibid.*

<sup>60</sup> Florentius confessus. Karissimo micique dilecto discipulo et pre gaudio retaxando Sanctionipresbytero benedicamus caeli quoque regem nos qui ad istius libri finem uenire permisit incolomes Amen. 「わたしが選んだもっとも愛すべき弟子、司祭サンクティウスにフロレンティウスは告白します。わたしたちは、この書が完成を迎えることをお許しくださった神の御国を賛美します。アーメン」 Sanctius presbiter. Et iterum dico magister benedicamus Dominum nostrum Ihesum Christum in secula seculorum qui nos perducit ad regna caelorum Amen. 「そしてわたし司祭サンクティウスもまた申します。我が師よ、わたしたちに主イエスキリストとその終わりのなき世を賛美させてください。キリストはわたしたちを天の御国に導いてくださるでしょう。アーメン」

<sup>61</sup> Williams 1962, pp. 146-49; Id 1976, p. 61.

<sup>62</sup> 久米順子『11世紀イベリア半島の装飾写本—“モサラベ美術”からロマネスク美術へ—』中央公論美術出版、2012年、pp. 190-191.

について執筆者も賛成である。テキストの内容に緊密に対応した図柄が選択される、という同写本の挿絵の傾向に従えば、オメガの人物像も「終わりなき世を賛美させてください *benedicamus caeli*」という銘文に呼応して、「杯を掲げる動作」によって描かれたと推定することは可能だろう。人物像が「杯を掲げ」ている根拠として、ウィリアムズは詩編 116 (115) 編 13 節の「救いの杯を上げて主の御名を呼び *calicem salutaris accipiam et nomen Domini invocabo*」を引用し、この図像の解釈に用いている<sup>63</sup>。この動作は「コリントの信徒への手紙一」の「神を賛美する賛美の杯 *calix benedictionis* (10 : 16)」、および「杯を掲げる」パウロの肖像 (図 6) にも対応しうる。杯を捧げる図像は、キリストの犠牲を記念するミサの典拠でもありパウロ書簡によって正しい飲食、杯の与り方が説かれたものであった。ウィリアムズはオメガの杯を掲げる動作に詩編 116 (115) 編を挙げたが、この節の解釈はカロリング朝神学において「聖血」を焦点とする贖罪論が展開されていた。例えば『ユトレヒト詩編』の該当箇所では、磔刑図の傍らに聖杯を持ったエクレスシア (教会の擬人像) f.51 が描かれている<sup>64</sup>。このことから、杯の図像はミサをはじめとした奉献、祈り、救いの杯に他ならず、贖罪論とも関わりうることが分かり、「オメガである」キリスト (黙 1 : 8, 21 : 6, 22 : 13) を囲む図像としてはふさわしいものであると言えるだろう。

ベアトウスは、黙示録第 2 章の解釈において、主の「肉を食べ」、「血を飲む者」が永遠の命に与る (ヨハ 6 : 54) が、ミサを受ける全員が必ずしもその恩恵に当てはまるものではなく、「コリントの信徒への手紙一」にあるように自らを省みることができる者たちだけに限られるとも書いている<sup>65</sup>。また、大グレゴリウスも『ヨブ記註解』で、寓意的な解釈の一つとして、ヨブとキリストの受難を対比させるヨブ記 2 章 3 節の文脈において、第一のアダムと第二のアダムとしてのキリストを挙げ、「もしも最初のアダムが傲慢の罪によって魂の死に導かれなかったら、第二のアダムは、罪なくして、けっして肉体の死にすんで入らなかっただろう。そしてそれゆえに、我々の贖い主<sup>66</sup> は彼に言う、理由もなく、わたしをそそのかして彼を破滅させようとした...」<sup>67</sup> と解説を加えている。この箇所は『960 年聖書』の作者の一人であるフロレンティウスによる『ヨ

<sup>63</sup> 直後の 118 節より、晩餐ののちの感謝の祈りであったとも推察されている。Williams, 1976, p. 61.

<sup>64</sup> 鼓みどり『ユトレヒト詩編挿絵研究—言葉の織りなしたイメージをめぐって』中央公論美術出版、2006 年、pp. 205-206; Chazalle, C., *The crucified God in the Carolingian era: theology and art of Christ's passion*, New York, 2001, pp. 204-208, 343-348.

<sup>65</sup> Beato de Liébana, *Obras*, pp. 192-195. 他に第二のアダムと明記しているのは p. 632. アダムの引用箇所については以下を参照。Eugenio Romero Pose, "El tratado de montibus Sina et Sion" *Gregorianum*, 187-4, Rome, 2006, pp. 273-301, esp. 290-291.

<sup>66</sup> 593 年にローマで行った福音書の説教において、グレゴリウスはキリストの呼称として REDEMTOR を頻繁に用いていることが指摘されている。『福音書講話』、p. 382.

<sup>67</sup> *Nisi enim Adam primum per voluntarium vitium in animae mortem traxisset, Adam secundus sine vitio in carnis mortem voluntariam non veniret. Bene ergo ei etiam de Redemptore nostro dicitur: Commovisti me adversus eum, ut affligerem illum frustra.* PL, 75, col. 612. 「アレゴリーによる解釈」と題した章で、ヨブの災難を贖い主の受難と類似し、サタンとの会話について解説している章句である。



ブ記』註解においても挿絵 (f.182) が挿入されている語句である。フロレンティウスがこれらの解釈を十分に知っていたことは推測できるだろう。また、大グレゴリウスの著作がパウロとの関連において、よく知られていたことは、同時代のベアトゥス写本に挿入された動物寓話挿絵の存在<sup>68</sup>からも見ることができる。パウロの書簡に関しては、ベアトゥスが参照したオリゲネスらの教父らも註解を残し、一部写本<sup>69</sup>も現存している。

『960年聖書』において繰り返された「杯を掲げる動作」は、「書誌目録」や、幕屋、パウロの肖像を経て、最終フォリオであり、キリストの象徴として写本の最後を飾るオメガの下部において献辞とともに捧げられている。写本完成を寿ぎ、神に感謝するとともに、その反復する描写と身振りによって旧約・新約を文字通りしめくり、来るべき「神の御国」を「杯の奉献」という形によって賛美しているのである。

## おわりに

以上、7点の特徴的な挿絵は、類例がないものと解釈され、『960年聖書』の写本全体における位置付けや、総合的な視点からの考察がなされることはなかった。「マイエスタス・ドミニ」(図1)も書誌一覧(図2)も、その特殊性から『960年聖書』において挿入された可能性がある挿絵である。アダムやキリストに共通する色彩表現もまた、この「マイエスタス・ドミニ」の挿絵に関連して創出されたのではないだろうか。「杯を掲げる」人物はレビ記(図5)やパウロの肖像(図6)、そして繰り返されるオメガの著者像(図7)に及ぶ。筆者は、この身振りの繰り返しは、単なる偶然ではなく、パウロ書簡に典拠を持つ賛美の杯の奉献に関連して挿入された図像である可能性

<sup>68</sup> アウグスティヌスやイシドルスに遡る孔雀の逸話をうけて、フロレンティウスは『ヨブ記』においてフォリオ大の孔雀の挿絵を写本冒頭 (f. 3v) に描いている。この孔雀に関してはアウグスティヌスの『神の国』第21巻、第4章(服部 英次郎、藤本 雄三訳、岩波書店、第5巻、pp. 266-268、1991年)が典拠の一つとして挙げられている。Williams, 1977, p. 53. 同様にイシドルスの『命題集』にも由来する、悪魔と戦うキリストの象徴である鳥の逸話は、ジローナ本 (f. 18v) などのベアトゥス写本や、『960年聖書』の系統を受け継ぐ『1162年聖書』(f. 6) に描かれている。『960年聖書』にこの挿絵があった可能性は、冒頭フォリオが一部散逸した可能性もあるために不明である。González, A. S., "Arqueología del Códice", *Veinte estudios*, pp. 87-110, esp. 90. しかし、この説話銘文にはパウロを指す使徒の言葉の定型表現、「だから使徒はいう」および「コリントの信徒への手紙一」(11:3)等の内容が加えられている。説話と図像の詳細は以下を参照、拙稿「鳥と蛇の戦い — ベアトゥス黙示録註解に描かれたキリスト教動物寓意図像の考察—」『美学』216号、2004年、pp. 56-68.

<sup>69</sup> イベリア半島において10世紀の「ローマの信徒への手紙」の註解書は18点現存している。Millares Carlo, A., *Corpus de códices visigóticos*, Las Palmas de Gran Canaria, 1999. vol. 2, pp. 305-317. 筆者はこれらの写本内容は未確認であるが、例えば西方で最初のパウロの13書簡の註解の著者とされ、当時はアンブロシウスと同一視されたアンブロシアステルは「ローマの信徒への手紙」第5章に関して「アダムは来るべき方の象形(forma)だったのである。一人のアダムによって犯された罪を一人のキリストによって正すことを、いまはもはや、神は秘義のうちに宣言されたからである。」という予型論的解釈を残している。小高毅編『原典 古代キリスト教思想史3 ラテン教父』pp. 149-161、引用はp. 157.



を提示したい。図像が加えられた意図は明らかでないとしても、少なくとも同一の身振りの反復が認められる点は事実である。その背景には旧約聖書の重視、さらに新約聖書との対応関係の図示、という意図が浮かび上がる。これらの図像は、他の多数の挿絵とは異なり、テキストの内容を直接反映させて描かれたものではない。しかし、ナラティブな解釈から外れ、単独に挿入された図像であったために、象徴的な意味を担うことができたとも解釈しうるのである。7点の『960年聖書』の特徴的な挿絵は、伝統的な図像表現の枠組みをふまえつつ、それを変化、反復させることで、同写本に視覚的な統一感を生み出しえたと言えるだろう。そしてこれらの変化こそが『960年聖書』の挿絵上の工夫であり、刷新点であったのではないだろうか。



図1 『960年聖書』 「マイエスタス・ドミニ」 f. 2



図2 『960年聖書』 「書誌一覧」 f. 4v

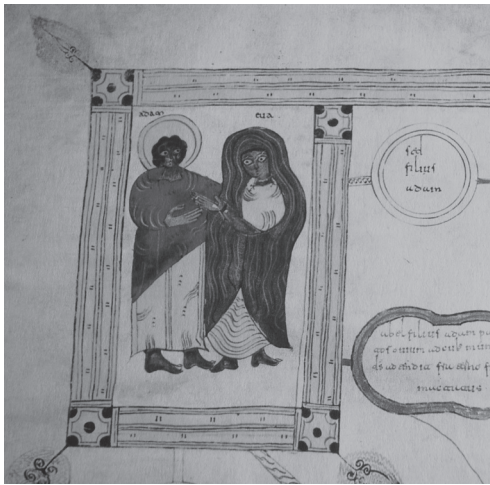


図3 『960年聖書』  
「キリストの系図」の亚当 f. 5v

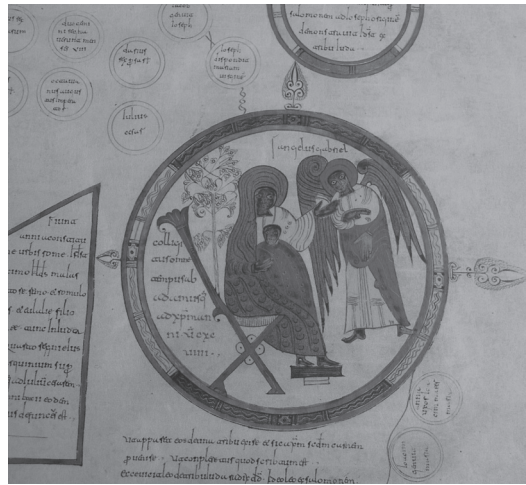


図4 『960年聖書』  
「キリストの系図」の聖母子 f. 10



図5 『960年聖書』レビ記表紙 f.50

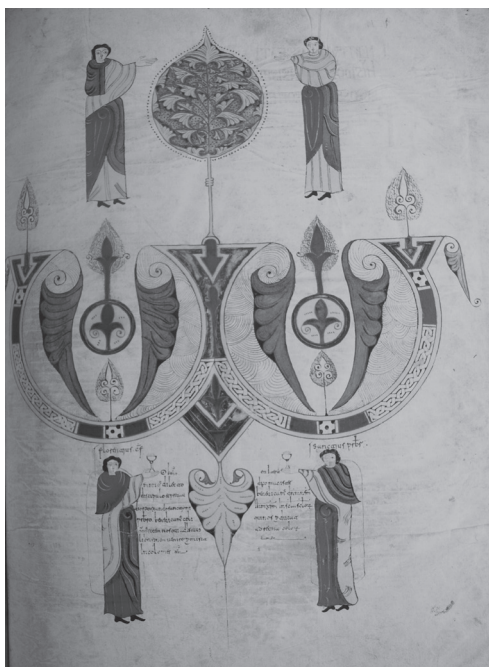


図7 『960年聖書』「オメガ」 f.514

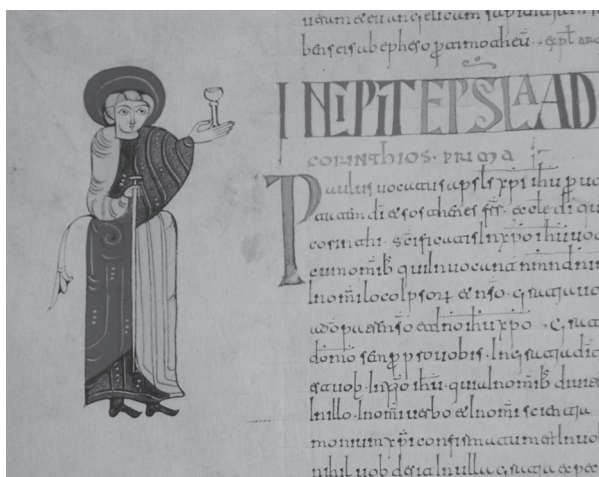


図6 『960年聖書』「コリント書の信徒への手紙」冒頭のパウロの肖像 f. 465v (左図)

※図版は全て『960年聖書』のファクシミリ(個人蔵)より執筆者が撮影した。